

ことばを学ぶ メカニズム

認知科学からのアプローチ

今井むつみ
Imai Mutsumi

第12回
〈最終回〉

共起関係から動詞のニュアンスをつかみ取る

❖ 共起関係からわかる類義語の違い

先月号では Visuwords と WordNet というオンラインツールを紹介した。Visuwords を使ったある単語をターゲットとした語彙ネットワークを大雑把に捉えつつ、WordNet でより精緻に単語間の関係やそれぞれの単語の多義の構造を探っていくと、英語の語彙ネットワークについて学習者に多くの気づきを与える。

ただ、WordNet だけでは類義の単語の細かい意味の違いはわからない。例えば *wander* と類義の *stray*, *ramble*, *drift*, *roam* などの意味はそれぞれどのように違うのか。これを調べるためには、コーパスが有効である。

例えば *wander* と *drift* の違いを見てみよう。動詞の意味の違いを探るには、まず、動詞と共起する名詞を調べることが有効だ。本連載(第9回)で以前紹介した COCA コーパスの“Compare”機能を使って動詞と4単語以内に現れる名詞を抽出し、各動詞と共起する名詞を比較してみよう。

wander は人を表す名詞のほか *cows*, *cats*, *bear*, *bison*, *animals*, *sheep*, *dog* など動物の名詞と共起することが多い。それに対して、*drift* は様々な無生物の名詞と現れることが多い。*boat*, *raft*, *ship* は頻繁に *drift* と共起し、日本語で言えば「漂う」という動詞に近い意味で使われる。その他に *clouds*, *mist*, *snow*, *ice*, *fog* など天候現象を指す名詞、*voices*, *laughter*, *scent*, *smell*, *smoke*, *odor* など、においや音のように、空気を伝わるものも *drift* の主語になることが多い。ここから、*wander* と *drift* はともに確たる目的

なしに移動するということころは共通するが、ずいぶん意味が違うことがわかる。*wander* は自力で動いて移動するが、*drift* は潮の流れ、空気の流れなど、動く主体が制御できない外からの力によって「動かされる」動きなのだろう。

wander と *roam* の違いはすぐにはわかりにくい。どちらの動詞も *child*, *people*, *visitors*, *tourists*, *soldiers*, *students* など人間を主語にすることが多いので、*drift* と違って、どちらも主体が自ら制御する動きであることがわかる。しかしさらに探っていくと *wolves*, *buffalo* (単複同形だが用例では複数形で使われている), *lions*, *bucks*, *beasts* などは *roam* の主語になりやすく、*wander* の主語にはあまりならないことがわかる。これらの名詞は群れをなして移動する大型動物であり、複数形で使われていることが特徴的である。*roam* と共起しやすく *wander* とは共起頻度が低い人間を指す名詞のトップは *gangs* である。動物の群れと同様に *gangs* にとってはテリトリーが大事で、それを守るためにあちこちに移動する(つまり「うろつく」)というニュアンスが浮かび上がってくる。

wander, *roam* はともに比喩用法として *eyes* や *gaze* など、人間が自分の意志で制御できる名詞と共起することが多い。しかし興味深いことに、その延長である *attention*, *thoughts*, *mind*, *soul*, *conversation*, *story* など人間の認知や知的活動に関わる名詞は (*roam* の主語になれないわけではないが)、*wander* の主語になることのほうがずっと多い。

wander はまた、*garden* や *office* などの身の回

りの限定的な空間を表す場所名詞との共起頻度が高く、その際、*daughter*, *son*, *husband*, *neighbors*, *student* など身近にいる人が主語になることが多い。

- I melted out of the office and *wandered* to the break area.
- A scattered cheer rang through the garden as the people *wandered* about.
- Our neighbors would *wander* over and ask what time the fun was going to start.
- Today, when my daughter and I were *wandering* through the hotel, . . .

これらの観察から *roam* と *wander* の間に次のような意味の違いがあることが見えてくる。*roam* は集団が群れをなして、広く拡散するテリトリーをはっきりした目標点をもたずに移動するような意味合いが強い。対して、*wander* は(やはりはっきりした目的や目標点なく移動する行為を指しながらも)、個人(個体)が自分の周辺の空間を行ったり来たりする意味合いが濃い。

これはあくまでも「ニュアンスの違い」であり、はっきりと辞書で定義してある違いではない。しかし母語話者が母語の単語の意味に対してもっているのはまさにこのような「ニュアンス」の感覚なのである。日本語に置き換えただけの「点」のような意味として単語を覚えるのではなく、1つひとつの単語をシステムの一部として捉え、その中の他の単語とどのように意味が違うのかを探索していくことで、1つひとつの単語の意味の理解をネイティブ話者のもつ深い理解に近づけていくことができる。

❖ 単語のネットワークに気づかせる語彙学習へ

4月よりお付き合いいただいた連載も今回で最終回になった。連載を通じてもっともお伝えしたかったこと、それは「ことばを知る」ということは単語1つの意味を日本語に置き換えた「点」としてばらばらに知るということではなく、そのことばを取り囲む他の単語との関係を理解し、それらの単語群がそれぞれの意味分野の語彙システムの中でどのようにその意味分野を切り分けていて、個々の単語が面としてカバーする範囲がどこからどこまでなのかを知ること、ということである。

言語は連続的で切れ目のない世界に対して線を

引き、世界を切り分ける。人は当然ながら無意識にそれぞれの母語のことばでの区切り方があたりまえで、もっとも自然な世界の分割の仕方だと思っている。しかし、言語によって線引きの仕方は多様だ。

つまり、外国語の語彙のシステムを学習するときには、母語でのシステムを再構築する必要があるということだ。しかし、人は外国語と母語の語彙のシステムが同じであると無意識に思いがちだ。その結果、一見対応する単語があると——つまり本来「面」である意味のどこかの「点」で2つの言語の単語の間に重なりがあると、その外国語の単語が「面」としても母語の語の意味と重なる、と考えてしまう。

このような思い込みを克服し、母語の語彙システムのすげ替えではない外国語の語彙システムを発見し、再構築するためにまずすべきことは、それぞれの意味の分野にどのような単語があり、それぞれの単語がどのような関係で結びついているのか、つまり、単語同士のネットワークを大まかに掴むこと、次にそれらの単語それぞれの多義の構造と単語間の関係を探っていくことだ。インターネットが発達した現在、本稿で紹介したようなネットで使えるツールを賢く使えば、学習者が自分で語彙のネットワークを探索していくことができる。高校や大学で英語を教えている方々は、ぜひ授業の中でこれらのツールを紹介し、英語語彙のネットワークを学習者がつくる活動をやってみてほしい。生徒が英語の語彙と日本語の語彙の構造の違いに気づき、日本語と英語の単語の意味が一対一対応していないこと、英語の単語を日本語にただ置き換えても英語の語彙ネットワークはつくれないことに自分から気づけばしめたものだ。語彙の学習には限りがないので、授業ですべての単語について掘り下げた意味を探索することは不可能だ。しかし、生徒が辞書とともにこれらのツールを活用してひとつひとつの単語の意味を深く探り、単語のネットワークを探索していく方法を覚え、それを自分で習慣的に行うようになれば、自律的にことばの世界を探究することが可能になる。それは真の意味でのアクティブラーニングになるはずだ。

(慶應義塾大学教授)